



# 受験生へ!

## 失敗を恐れるな!!

今年もあと一カ月余。そしてキミ達の勝負する時がすぐ目の前まで迫ってきている。「いつでも来い!」とファイト満々の人もいるだろう。一方で、不安と焦りで心が押しつぶされ、毎日が苦しくてたまらない人もいるだろう。できることなら逃げ出してしまいたいと思っっているかもしれない。

●さて、そんな受験生に送るエールである。

●まず、「不安や焦りがなぜ生まれるのか」を考えてほしい。それは、キミ達が、自分ひとりの力で何かを成し遂げようとしているからに他ならない。自分にとってどうでもいいことなら、誰も苦しめない。また、自分にとって大切な人が不安や焦りの中においても、自分自身のことではないから、それほど苦しめない。再度言う。キミが求めるからこそ生まれる苦しみなのだ! ●そして、この苦しみは、これから先、キミ達が何かを成そうとするとき必ずついてくるものなのだ。近未来の話でいけば、更に就職の時に、同じような思いを経験するはずだ!

●次に、「不安や焦りは、誰にでも、必ずあるのだ。」ということを確認なさい。自分だけが特別

なのではないと知りなさい。そうすれば不安や焦りは消えないが、楽にはなる。

●更に不安や焦りは、何ら実体のないものだということを中心に刻みなさい。受験がうまくいくかもしれないし、ダメかもしれない。しかし目標に近づくためには、とにかくやるしかないのだ。間違いなく言えることは、不安や焦りに流されると、絶対に目標が遠のくということだ。不安を抱えていてもよいから流されるな。そして、流されないための方法は一つしかない。歯を食いしばってやるべきことを続けること。これに尽きる。

●最後に勉強の内容で一つだけアドバイスをすると、「過去問」を重視しろということ。眺めるだけではダメで、徹底してやりこむのだ。出来が悪くても気にするな。まだ時間はある。解答解説をじっくり読んで同じものが出たら、完全にできるという状態にすること。これで必ず伸びる。



●再言するが、きちんとした勉強を実行・継続しなさい。不安や焦りに特効薬などないのです。必要なのは、やるべきことを実行・継続する勇氣。失敗するかもしれませんが、しかし、勇氣を持てば、その失敗が、敗北ではなく、全ての終わりでもないことが分かってきます。そして、それは、またこれからの自分を力強く支えてくれるはずです。

(小林(健))

# 教科書改訂(中学)

一時話題になった教科書改訂。小学校は今年から教科書の内容が増えている。使用する教科書会社自体を変えた学校もある。高学年生は体感しているかもしれないが、厚くなっている。

対して、あまり話題になっていない感じがあがるが、来年度は中学校の教科書が改訂される。今回、中一・中二の保護者会でもその件に触れたが、実際生徒のみんなは知っていただろうか?その改訂に伴う変化や準備について考えた。

まず、今君たちが使っている教科書は二〇〇六年に改訂されてから使用されているものだ。教科書の内容自体は二〇〇二年に一番内容が少なくなったのち、二〇〇六年に発展学習という形で少し内容が増えたものである。教科書の内容は一九六〇年代から徐々に減っていき、二〇〇二年度で量が最低になった。

実際に増えた量は、二〇〇六年の教科書と比較して、一・三倍のページ数になっている。しかも国語、数学、英語、理科、社会は大幅に増えている。(詳しい数値が知りたい方は、講師に聞くか、保護者の方に資料を見せてもらおう。)だから何だ、というところ今の学習これからの学習に望む心がまえをきちんと持ちたいということだ。

みんなの世代はいわゆる「ゆとり世代」といわれ、学習内容が減っている。週休二日も当たり前になっている。先日生徒と



のやりとりでも、「今日六時間だったから疲れた」と言う。私たちの世代(内容も多少減っている世代)でも、土曜日も授業があったし、週のほとんどは六時間授業だったと記憶している。比較してしまうと、ずいぶんゆとりの時間があるはずだが。(私も中二から塾にも行っていたし、部活も三年間しっかり行っていた。)

周りのみんなも同じ環境で同じことを学習しているのだから問題ないと考える人もいるだろう。しかし、中学・高校を卒業して社会に出たとき「ゆとり世代」だからといって、仕事が楽になるわけでもないし、社会が大目に見てくれないと思われただけかもしれない。しかし、そんな社会にでもみんなにはしっかり働いて、しっかり生きていって欲しいと願う。創学舎で学ぶ君たちは、宿題や授業、補習をしっかりとこなし、力をつけ、社会に出ていって欲しい。来年からは学校で学習する内容も増えるが、そんなことでめげてはいけない。今やっていることをきちんと身につけて、来年内容が増えようがしっかりと取り組むことだ。一度身につけた、技能や知識は一生自分の役に立つものだからだ。

(松永)

# 追悼 小松左京

●「巨星墜つ」――まさにそのような形容がふさわしい。七月、日本SF界の第一人者、小松左京氏がこの世を去った。享年八〇歳。高校時代に、「復活の日」や「日本沈没」で氏の作品に触れて以来、私は、氏の描く、世界観―大災厄が訪れた時に、国家は、為政者は、経済は、市井の人々は、どう行動するのか―、また底流に流れる現代文明に対する鋭い批評の眼に魅了され、前記のような長編以外にも、かなりの数に及ぶ短編を読み漁ってきた(時には旅行で訪れた土地の古本屋で絶版を見つけながら)。だが、晩年は著作も少なく、「日本沈没」の第二部(海外へ脱出した日本民族のその後を描く。出版された「日本沈没」の最後には「第一部完」と書かれている。)も本人の手では実現されなかった。

●氏の主な作品群は、一九六〇〜七〇年代に書かれていながら、まるで古さを感じさせない。むしろ、東日本大震災による動揺がまだ残る現在の日本では、大変な説得力を持つのと同時に、いくつかの指針を与えてくれるようにすら感じる。この場をお借りして、それらの一部を三行書評風に御紹介させていただきたい。

●日本沈没―一人の科学者の直感により予見された大災厄に対して、政府は極秘裏に回避計画をスタートさせる。京都、東京での大地震の後、

富士山が大噴火し、沈み始める日本。大地震の描写も恐ろしいが、沈没までの猶予が十カ月と判明してから政府による公表までの社会不安の描写が秀逸。また、一億もの日本人を世界が難民として受け容れてくれるのか、という命題には、逆の立場を考えた時に胸をつかれる思いがある。作中では、このような状況でも暴徒化しない日本人の国民性にも触れられており、あらゆる意味で先見性の高さに驚かされる。読後は、日本人とは何かを考えずにはいられない。

●復活の日―核兵器全廃条約の締結を目前にして、英国で極秘開発された細菌兵器が持ち出され、世界中に拡散。圧倒的な致死率により人類はわずか三カ月で死滅してしまう。極寒のためウイルスが活動しない南極の、観測隊員一人を残して……さらに、人類死滅後のアラスカで起こる巨大地震が、南極大陸の最後の生き残りを滅ぼしうる災厄の引き金となることが明らかになる……。滅びゆく世界が壮絶に描写され、随所に文明論が展開される。医療の場で人類を救いうるウイルスが人類を滅ぼし、人類を滅ぼすはずの核兵器が人類を救うという逆説が、人類という種の存在の矮小さを浮き彫りにする。四〇年以上前の作品とはとても信じ難い。

●物体O(オー)―ある日突然、日本列島上に、直径千キロの超巨大なO状の物体が落下。O内の地域はO外の世界との一切の通信が途絶する。東京が圧壊したため、新しい行政機構と自給自

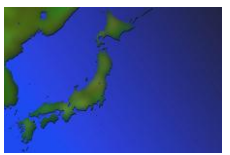
足体制の確立に奮闘するO内の人々。そんな矢先、Oが突然消失する……。最後に、この物体の意外な正体が明らかになる(これぞSF!というラストである)が、作中で犠牲になった人々を思うと、大変やりきれない気持ちになる。

●影が重なる時―ある都市で、あらゆる人、物体すべての幽霊(自分には見えるが他人には見えない)が出現するという怪事件が発生。主人公の新聞記者は、真相究明に奔走するが……。大国のエゴに何の落ち度もない人々が巻き込まれる悲劇。

●召集令状―どこからか突然送られてきた召集令状。これを受け取った若者たちが召集日に失踪する事件が多発し、社会はパニックに陥る。そして、もつと上の年齢層にも召集令状が届くようになり……。この異常事態に日本の社会が対応していく過程が大変リアルである。最後の一行は恐怖の一言に尽きる。

●戦争はなかった―終戦時中学生だった主人公が同窓会に出てみると、誰も太平洋戦争を知らないと言う。なんと日本全体から太平洋戦争の記憶が消えていたのだ。そのとき、主人公の行った行動とは……。

●見えない明日―舞台は冷戦下の中ソ国境。謎の宇宙生物の侵入によって、人類はあつという間に滅亡の淵に追いやられる。と、書くと漫画



的だが、内容は極めて現実的な政治サスペンス。意志疎通のとれない敵に対して、冷戦下の人類は同じ種でありながら意思疎通が取れずに、対応が後手にまわる。

●春の軍隊―春の昼下がり、静かな新興住宅地に突然出現した国籍不明の軍隊。かれらは別に現れた他の国籍不明の軍隊と交戦を開始、日本各地で市街戦を展開する。混乱の中、多くの市民が犠牲になり、自衛隊の出勤に対して核兵器での応戦をおわせてくる相手に、政府は無策のままだった。そして、四十八時間後……。戦争の暴力性が見事に描かれた一編。

●夜が明けたら―夜間に発生した小規模な地震のあと、日本中の電力がすべてダウンし、電池やバッテリーすら動作しなくなる。真つ暗な街に出た主人公は、天文台から来た男に夜空を見上げるように言われ、驚愕の事実を知る。この物語の「その後」を想像し、背筋の凍る思いをするのは私だけではないだろう。

大人でも読みごたえのある作品だが、社会学が好きな生徒は簡単に読破してしまう。かれらの知的好奇心を大いに刺激するらしい。次世代の人々にとって、世界をとらえる方法の一つの示唆となれば、小松氏も本望であろう。(関)

▼▲継続希望の方へ▲▼

▶転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。

▶在籍していた教室までご連絡下さい。